
ハートイズガン

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハートイズガン

【Nコード】

N0253Z

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

ピストルを手に入れた俺は有頂天になった。けれどそんな俺が知った現実。チェッカーズシリーズ第六十九弾、フミヤさんと大土井さんの曲は名曲ばかりです。

第一章

ハートイズガン

俺は遂に手に入れた。それをだ。
ピストルだ。それを遂に買った。

思ったより安かった。ガンショップで普通に売っていた。
黒くてずっしりとするそれをはじめて手に取ってだ。俺はだ。
まずは俺のフレンズに銃を見せた。見せびらかした。
それでだ。こう言うのだった。

「なあ、凄いだろ」

「ああ、ピストル買ったのか」

「そういえば許可証貰ったんだよな」

「前そんなこと言ってたよな」

「ああ、そうだよ」

こう答えてだ。そうしてだった。

俺はだ。またフレンズに言ってやった。

「遂にな。買ったんだよ」

「それで俺達に見せに来たのか」

「そのピストルを」

「そうしたんだな」

「ああ、これさえあればな」

俺は得意になってだ。心の奥底から笑って話した。

「何でもできるな」

「だよな。強盗もできればな」

「気に入らない奴をぶっ殺すこともできる」

「ピストルさえあればな」

「何でもできるからな」

フレンズもだ。こんなことを言ってきた。実際にそんなことをすれば一発でムシヨ行きだがそれでもだ。俺達は笑ってこんな話をし

た。

「ピストルさえあったら」

「怖いものなんて何にもないな」

「スクールで撃ってみるか？」

フレンズの一人がここで物騒なことを言い出した。勿論ジョークだ。

「そうしたらニュースに出るぜ」

「おお、やるか？」

「それいいよな」

「どうだよ、それ」

「有名人になって来いよ」

他のフレンズもだ。俺に言ってきた。そのピストルを買った俺にだ。

「気に入らないティーチャーの足元に撃てば面白いぜ」

「ティーチャーマイヤーなんてどうだ？」

「あのオールドミスな」

もう四十を超えてるのに今もシングルのティーチャーだ。痩せぎすの眼鏡の顔にヒステリックな性格をしている。シングルなのもわかる人だ。

そのお婆さんの足元にだ。撃ってみたらどうかというのだ。

「どうだよ、それ」

「あのお婆さんきつと騒ぐぜ」

「それこそ頭が燃えたみたいにな」

「そうなるぜ」

「そうだな。それも面白いな」

俺はジョークで応えた。実際にそれも悪くないかなんて馬鹿なことを考えた。何かピストルを持って色々と考えちまう。それが今の俺だった。

「銀行強盗も悪くないしな」

「だよなあ。本当にピストルがあったらな」

「もう無敵だよな」

「一発で気に入らない奴を天国に行かせられる」

「便利なおもちゃだよ」

そうだった。本当に便利なおもちゃに思えた。

第二章

これで撃てばどんな奴でもお陀仏だ。それを思うとだ。

テンションが何処までもあがる。俺にとっては最高の気分だった。その気分の中で。俺はフレンズに対してだ。また話すのだった。

「じゃあこれ持ってシティを歩くか」

「おっ、ヒットマンになるか？」

「それでターゲットをドカンか」

「ああ、そうして来るぜ」

今度はそんなことを言った。けれどシティに出てみようと思ったのは本当だ。それで気に入らない奴がいればなんて考えていた。後半は勿論ジョークだ。

「それじゃあな」

「ああ、じゃあな」

「ちよつと楽しんで来いよ」

「マイクⅡハマーになってきな」

今度は考えるよりまず動いてそれで相手をそのピストルで倒す探偵のつもりになることになった。そんなクレイジーな話をしてだ。

俺はピストルをジャケットの中に入れてシティに出た。いつも歩いている場所なのにピストルを持っているってだけでだ。気持ちがいぜん違った。

何かが違った。いざとなればピストルを出せる、そう思うとだ。楽しくて仕方がない。何時でも撃てると思えばそれだけでだ。もう最高の気分だった。

俺の両肩でデビルとエンジェルが話し合っているようにも思えた。このピストルを持っていつちよどつかのストアで強盗でもしようか。そんなことも考えた。勿論本気じゃない。

他の圧も持っててそれで隙を見せたら撃たれる、そんなことも考えたりもした。

あれこれ考えてるとだ。急にだ。

俺の横をパトカーが横切った。それも何台もだ。

そのパトカーの一団が銀行の前で停まった。そしてすぐにだ。

ポリスが十人単位で展開してだ。銀行に立てこもる強盗の連中と派手な銃撃戦をおっぱじめた。随分な展開だった。

何かだ。ポリスの連中がだ。こんな話をしていた。

「おい、ピストルじゃ足りないぞ」

「おっつかないぞ」

「あれ持ってるか？」

「ああ、持ってきた」

こう怒鳴りながら言ってだ。それでだった。

パトカーの一台からだ。ショットガンにだ。

マシンガンまで出してきた。それでだ。

銀行に立てこもる強盗の連中を攻撃しだした。中に人質がいるかどうかなんて全く考えずにだ。中に向けて派手に撃ちだした。

事件はこれで解決した。流石にショットガンやマシンガンに立ち向かうには装甲車でもない無理だ。そんな無茶な風景を見てから。

俺はジャケットの上からピストルを摩った。それでこう呟いた。

「おもちゃなんだな」

そんな派手な銃撃戦を見た後じゃ。そう思った。

それまで手に入れて最高の気分になっていたピストルもだ。所詮そんなものだった。

本当におもちゃだ。ガキのおもちゃだ。それがわかった。

それで俺は踵を返して家に帰った。そうした。

これが俺がピストルを手に入れた時の話だ。今思うと本当にガキのだ。下らないいきがりだった。俺は今もこの時のことを思い出すと苦笑いになっちゃう。そんな昔話だ。

2
0
1
1
•
4
•
2

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0253z/>

ハートイズガン

2011年12月1日00時51分発行